

徳田秋聲最後の「抵抗」

——新資料・「熊本日日新聞」掲載の時局記事をめぐって

大木 志門

一 はじめに——秋聲の全集未収録作品

本稿は徳田秋聲の最晩年に書かれた新発見の資料を紹介するとともに、そこから見えてくる問題、具体的には太平洋戦争中の言論統制および、その中で日本文学報国会（昭和十七年五月結成）の初代小説部会長であった秋聲の言説を考察するものである。

この資料は本郷森川町（現・文京区本郷）の徳田秋聲の旧宅から切り抜きの状態で発見された八段組の新聞記事で、「武力戦のみならず文化の全面に賢くなること」という題名の文章である。

秋聲長男・徳田一穂の雑誌・新聞掲載紙誌の切り抜きのスクラップから発見されたため、秋聲の没後に一穂が整理して保管していたと推定される。これまで著作目録から漏れていたのは、掲載が「熊本日日新聞」という地方新聞であり、『灰皿』（昭和十三年、砂子屋書房）、『老眼鏡』（昭和十五年、高山書店）、『寒の薔薇』（昭和二十三年、東京出版）と三冊刊行された秋聲の随筆集にも未収録であったためである。またそれらに収録されなかったの

は、時事的性格が強い文章であるからである。

切り抜きに一穂の筆跡で記された掲載紙名と日付を頼りに国会図書館所蔵のマイクロフィルムで調査を行ったところ、昭和十八（一九四三）年一月五日付「熊本日日新聞」の紙面に当該記事が発見することができた。まず次節にこの記事の画像と翻刻を掲げるが、仮名遣いは原文通り、ただし適宜旧字は新字にあらため、ルビは省略を行ったことをおことわりしておく。

二 記事の翻刻

武力戦のみならず文化の全面に賢くなること

徳田秋聲

有史以来未曾有の世界戦乱のあわただしい推移のうちに、我等はこゝに大東亜戦争第二回目の新春を迎へ、緒戦の餘りにもすばらしい戦果に対する感激を新たに喚び起し、引続き頻々として我等の耳朶を打つて来れる、太平洋諸嶋における空海陸にわたる幾多の輝かしい戦果によつて、英、米、蘭の多年亜細亜侵略の足場



とせる要所々々を、瞬く間に覆し、さしも用意周到を極めた米英の対日包囲陣を突破すると共に過去百年にわたつて、亜細亜の諸民族を蚕食しつゝ、あつた彼等の毒牙に、徹底的な大手術を行ひ、亜細亜諸民族を彼等の桎梏から解放したことは、何と言つても世界の驚異と言はなければならない。勿論これを以て此の難事業が完成したとはいへない。たとひ一応彼等の東亜に於ける足場を覆したと言つても、この戦争と切り放しては考へられない重慶政權

が、依然として米英と気脈相通じ、長期抗戦の体制強化に鋭意し、印度も亦容易に英国の強圧を脱するに至らずしかも独ソ戦^マは七分程度の枢軸陣営の勝利を獲得したとは言へこの冬も亦膠着状態に入り、米英また北阿西阿に抜け目なき軍事的工作を進むのに狂奔し対日圧迫としてはアフリカ、インド、ビルマ、重慶の聯繫を謀るのに油断なく、北方アリユーシヤン方面と、南方ソロモン方面と相俟つて、志那からの日本本土空襲の足場を作るのに汲々たる有様で、しかも新たに戦争に参加したばかりの米国の戦時体制も亦侮るべからざる緊張度を示し豊富なる物資の力を頼んで、飛行機と船舶の建造に全力を傾注しつゝ、あり、戦は正に是からだと見るのが至当であらう。世界の強国米英を相手に火蓋を切つた以上我が日本の当事者に、それだけの計算と見透しのあつたであらうことは勿論で、開戦以来国内政治の各般にわたつての緊密なる諸の施策と、上下を貫く嚴肅なる待機の気分にもその事は窺へるのである。ソロモン海戦で、敵国の反撃的態度に敗北に敗北を重ねた今迄の脆さと軽率さに比べて、執拗なる粘りを見せて来て以来、今迄自由主義国たる敵国の弱点ばかり挙げて、自から得たりとしてゐた人々も、夏の末頃から漸く、そこに気がつき、外敵に当たる場合の民族の決意が、不断平和の時と、自らその内容を異にするものであることを、敵ながら天晴と感じ、各自にいくらかは免れなかつた戦捷の当座の酔からさめたことは互に慶祝しなければならず、感激し易い代りに、また冷め易いとせられた国民の性格を矯め、天馬空を斬る底の情熱を共に、不幸にして今より遙かに不利な立場に置かれた場合に処することがあるとし

ても周章でず惑はず、沈着冷静事に当り、国家の前途を過らせないやうに、肝をすゑてからでなければならぬ。王侯将相豈に種あらんやといふことを放言して、功名富貴手に唾して取るべしと、起ちあがつたものも昔し志那の乱世にはあつたが、オランダやスペイン、ポルトガル、続いては英国や米国が近代の科学に目ざめて、機械化産業の勃興と、船舶の製造、航海術の発達とによる海洋の克服により、豊富なる亜細亜の資源を探ると共に市場を獲得し、亜税^{マニラ}民族を搾取しはじめたのも、さう古いことではない。日本が彼等の毒牙にかゝらなかつたのも、素より感性の鋭い民族の性格にもよるだらうし、長い間に鍛へられた尚武の氣象が物を言つたからでもあらうが、維新前後の政治家の並々ならぬ苦心にも因るであらう。今次の戦争の淵源は古く、動機は新らしい。この淵源と動機は永久に続くものと見なければならず、一勝一敗を以て猥りに事が決したと思ふ事は出来ない。維新後に産れた我々は、動もすると米英の世界制覇が歴史的な運命のやうに考へられた事もあるが、之は言ふまでもなく錯覚である。たゞ欧米には科学に基礎をおいた各般の學術があり、利用厚生の点では、道德一本立の東洋の學問とは、自ら異なるものがあり、我々はそれをも克服し、武力戦のみならず、文化の全面にわたつて、賢くなる事が日本を偉大ならしむるためにも、亜細亜を興起するためにも必要である。

(十七年十二月病床にて)

三 掲載紙「熊本日日新聞」について

この秋聲の署名記事が掲載された「熊本日日新聞」は現在まで続く伝統ある県内の第一紙だが、当時は「一県一紙令」により昭和十七（一九四二）年四月一日に対抗紙である「九州日日新聞」と「九州新聞」の二紙が合併して創刊されたばかりの新しい新聞であつた。前身にあたる「九州日日新聞」は、「国民新聞」で徳富蘇峰の薫陶を受けたのちに社に戻り、大正四（一九一五）年に文化面を刷新した後藤是山の功績で、長く県内で文化運動の主導的存在を務めた新聞であつた。しかし新たに創立された「熊本日日新聞」は、「新聞報国の一念」（昭和十七年六月二十日付同紙、創立記念式典の見出しより）を目的に創設された新聞であり、戦時体制の強い制約の中での報道を余儀なくされた。

熊日社史編纂委員会編『熊日五十年史』（一九九二年、熊本日日新聞社）を繙くと、皇室と戦争報道はすべて県庁特高課による検閲が入り「記事の内容はもちろん、紙面のニュースの位置や扱い、見出しまで細かい干渉が行われた」と記されている。さらに戦争末期になると特高課員が新聞社に常駐して「原稿を書く記者の傍らで一々検閲」し「時にはせつかく鉛版になった記事をノミで削つて印刷した」ほどであつたという。当時の政治部長・島田四郎の証言によれば、厳しい検閲の中で新聞側も「そのうち向この心理を読んで差し止めを受けないような紙面づくりを」するようになり、「思うような新聞を作れないのは重苦しくもあつたが、われわれ自身も尽忠報国という姿勢に燃えて新聞作りに取り

組んだ」とある。

秋聲の記事が掲載された同日の紙面を見ると、第一面には「新設敵航空基地メラウケ港爆撃／南北に米襲敵機撃墜」「社説 敵の反撃愈々執拗」など、他の面にも「戦ふ生活」実践座談会」「豆戦士も決戦参加／国民学校卒業生配置」「兄戦病死の報に／頑張る青年」「大日本婦人会が／慰問使派遣」などの記事が見られ、まさに戦時体制一色である。文化欄には連載小説の中山義秀「結婚衣装」、八波則吉「源実朝」を読む、「愛国百人一首 解説と朗詠」の会の告知が掲載されているが、秋聲の記事は文化欄掲載ではない。

では、秋聲とさして強い繋がりのあるさそう熊本の新聞に、なぜこのような署名記事が掲載されたのであろうか。試みに前掲の社史から同社の創刊時のスタッフを抜き出すと、取締役社長・伊豆富人（元「九州日日新聞」社長）、取締役副社長・吉川義章（元「九州新聞」代表）、主筆・西島満、編集局長・矢野一郎、政治部長・島田四郎、文化部長・平島澄雄、社会部長・中島一夫という名が見られるが、直接的に秋聲との関係が深い存在はいないようである。ちなみに同紙の創刊から記事掲載の昭和十八年はじめまでの連載小説は、戸川貞雄「第二の感激」（小川真吉画、昭和十七年四月八日～七月十五日）、片岡鉄兵「山河一望」（富田千秋画、同年七月十六日～十一月四日）、中山義秀「結婚衣装」（山田春吉画、同年十一月五日～十八年四月八日）である。このうち戸川、片岡、富田らは秋聲といくらかの関わりがあるので、そのような伝手を用いた依頼と考えられなくはない。しかしむしろ、

社主の伊豆富人は衆議院議員（熊本二区）で昭和十四年の阿部信行内閣の文部参与官まで務めた政治家でもあるので、伊豆の直接の命によって秋聲に依頼が行ったのではなからうか。陸軍人である阿部信行（金沢出身）は旧制四高に通っていた時代があり、前身の第四高等学校中退の秋聲とは同窓会を通じて面識があった。熊本県内で昭和十七（一九四二）年十一月に「熊本市文化報国会」と「大政翼賛会熊本地方統制委員会」が相次いで発足する中で、文学報国会小説部会長の肩書を持つ秋聲の時局についての署名記事が求められたと考えられる。

四 最晩年の秋聲―複数の「絶筆」と記事の位置づけ

当該記事「武力戦のみならず文化の全面に賢くなること」は、その末尾に「昭和十七年十二月病床にて」とあることから、かなり具体的な執筆時期が推定できる。この前後の秋聲は、前年昭和十六（一九四一）年九月に『縮図』（都新聞）を連載中止に追い込まれ、創作の筆を実質的に折っており、その後はいくつかの短い文章を発表しただけであった。また「病床にて」とあるように、この年、昭和十七（一九四二）年七月、秋聲は長男の一穂と末娘の百子とともに北海道に渡ったが体調を崩して帰京し、八月十六日には『三代名作全集 徳田秋聲集』（同年九月、河出書房）の後書きを徹夜で執筆して咯血、以後通院しながら治療が続いていた。その後は小康状態の時期もあったが、やがて肋膜の癌が見つかって入退院を繰り返すようになり、昭和十八（一九四三）年十一月十八日に帰らぬ人となる。

よって本記事は、秋聲が亡くなる年に発表された数少ない作品の一つということになる。『徳田秋聲全集別巻』（二〇〇六年、八木書店）の「著作目録」（十文字隆行作成）によれば、昭和十八年発表の作品は五月三日刊「健民」七巻五号掲載「寒の薔薇」、八月一日刊「新創作」五巻四号掲載「病床にて」、没後の十二月十五日刊「近代日本文学研究 明治文学作家論 下巻」（小学館）の「序文」の三作品となっている。このうち秋聲の没後に出了随筆集『寒の薔薇』（昭和二十三年一月、東京出版）収録の随筆「病床にて」は船山馨らの同人誌「新創作」に発表された随筆で、同誌の佐々木翠が口述筆記したものであり、全集別巻収録の年譜（松本徹作成）では同年七月にその「病床にて」の校正刷りに手を加えたものが「絶筆」とされている。

また同随筆集の表題作「寒の薔薇」については、横光利一門下でのちテレビプロデューサーとなった松本美樹「秋聲先生の温容」（昭和十九年一月「鶴」）の証言がある。これによると、昭和十八年一月に「健民」を編集していた松本が秋聲に俳句を依頼すると「一と月ほどして後に、俳句はできたが少し文章をつけなくちゃ」と言われたという。その後の秋聲は「お書きになれる日でも続けて半枚位お書きになると、もうその日は一日手が利かぬ程」で「しかし、たうとう四月なかば頃になつて俳句のある（思ひもよらぬ）半折七枚の随筆を手渡され」、それが「絶筆」になったという。徳田一穂による『寒の薔薇』「あとがき」では時期が「四月の終り」とあるが、こちらは自身で最初から最後まで書いたという意味での「絶筆」ということになる。一穂も「父が筆

を持つた最後の原稿」（同前）と書いている。なお、この時秋聲が作ったのは「寒の薔薇十日になりぬ咲きも崩れず」「十輪の薔薇の蒼や血肝のごとく」の二句であり、同年一月十日過ぎに小寺菊子が病床に持参した十輪の薔薇の花束の蒼が二週間近くして咲き誇ったのに感興を得て詠んだものである。後者はその死を予感させる句でもあり、「血肝のやうな血が出ましてね」と一穂から聞いた松本は「胸が鳴つた」という。なお一時は「長いあひだの家庭生活で、殻のやうになつた生活を打壊さうと（中略）行動したお蔭と都会文化の進化とで、季節即ち幼少から染みこんだ自然を余り思はなくつた」（「俳句より小説」昭和八年十月「若草」）と書き趣味の社交ダンスに励んでいた秋聲だが、その雅号はもともと俳句で用いたものであり、紅葉門下時代に慣れ親しんでいた俳句に最晩年は回帰したことがうかがえ興味深い^③。

残る『近代日本文学研究 明治文学作家論 下巻』の「序文」は徳田一穂によると「昭和十七年秋の終りに書いたもの」（同前）である。他にも執筆時期が不明な最晩年の作品として、没後に戸棚から「縮図」の一回分の書きかけ原稿とともに発見された「古里の雪」と題された半ペラ九枚だけの原稿があり、これが小説としての絶筆にして遺作とされている。同作は戦後昭和二十二（一九四七）年、金沢の卯辰山望湖台に谷口吉郎設計の徳田秋聲文学碑が建立された記念に地元の白山書房から刊行された短篇集『古里の雪』に初収録された。本作はほんの冒頭しか書かれておらず未完だが、石川文化振興会から招待された昭和十七（一九四二）年二月の生前最後の金沢行きを題材にしたことがわかつている。

この「父の唯一の遺稿」(徳田一穂『古里の雪』「あとがき」)については、秋山稔による「挿話・町の踊り場」(二〇〇五年、能登印刷出版部)の「解説」が明らかにするように、「ふるさとの雪を書きに／徳田秋聲氏」という小見出しの談話が同年二月二日付「北國毎日新聞」(現「北國新聞」)に掲載されており、ここから秋山は本作が「帰郷当日にはすでに構想されていた」と推測している。

ちなみに、このとき秋聲を招聘した石川文化振興会とは、石川県大聖寺生まれで「石川読売新聞社」の社主だった北川重吉が昭和十四(一九三九)年頃に発足させた組織であった。北川は養家の没落によって大聖寺から金沢に移って生育し、「北陸新聞」の給仕を経て暁烏敏や高光大船らの「愚禿社」に出入りし、上京後には帝大新人会の人々と知り合って思想運動に目覚めて吉野作造の聴講生になり、のち東京中央新聞、甲府の民声新聞などに勤務したジャーナリストであった。やがて帰郷して名古屋新聞金沢支局などで働きつつ、大正十五(一九二六)年に日本プロレタリア芸術聯盟金沢支部の創設に参加、昭和二(一九二七)年には労働農民党石川県支部の結成に参加して執行委員を務め、翌年には検閲制度改正期成同盟金沢支部の創設に参加、同六(一九三一)年には北陸振興文芸協会の創設と機関誌「世紀文学」を創刊した。しかし自ら興した「石川読売新聞」が傾いたために東京へと蓄電した北川は、井の頭公園内の料亭跡に間借りしながら再起を期し、在京県人の助けを借りて創設したのが石川文化振興会であったのだ。彼は長女を近隣の明星学園に通わせていた縁から、同校

の創立者で金沢出身の赤井米吉と知り合い、赤井や同郷の秋聲の講演を企画して郷里へ送り込む活動を始めたのである。^④

つまり昭和十三(一九三八)年発足の国策研究機関「太平洋協會」の常務理事に就任し、同十七年に陸軍省軍属・陸軍司政長官となり、のち同二十(一九四五)年四月の阿波丸事件で非業の死を遂げるイスラム専門家の筈間杲雄(金沢育ち)とともに秋聲が講演に呼ばれたのは、北川重吉という労働派の元新聞人が作った文化団体によってであったのだ。秋聲の肩書きは同会の顧問であり、同郷の縁で引き受けたものであろう。昭和十八(一九四三)年五月二十九日付け秋聲宛の同会の会費振込依頼状には、理事長代行の常任理事に清水茂松と氏家長明の名が、会の所在地として東京市下谷区仲御徒町二丁目五十四番地が記されている。清水は医学者、氏は海軍将校だがいずれも金沢の出身である。なお秋聲は、昭和三(一九二八)年の第一回普通選挙で菊池寛を擁立した社会民衆党(労働農民党右派が作った政党)から郷里で昭和五年の第二回普通選挙に出馬する話が出たことがあり、結果的に撤回されたが、この時代からの無産政党との人脈が続いていたことも考えられる。また、その最後の帰郷時に金沢の浅野川沿いの尾山俱樂部で行われたという講演をまとめたと思われるのが「郷里金沢」(昭和十九年七月「八雲」)である。^⑤

ところで昭和十七(一九四二)年十一月二十九日付けの川端康成の秋聲宛葉書には、「八雲の創作のことお心におかけ置き被下れば幸に存じます」(全集別巻の年譜より)という文言がある。「古里の雪」は前述のように未完で寄稿された形跡がないので確

かにはわからないが、既に指摘されているように本作はこの川端の依頼に答えるようにと推定される。戦後に『縮図』（昭和二十一年）を刊行した小山書店が出していた雑誌『八雲』は川端が編集に関わっており、結果的に秋聲の死によって創作が得られなかったため、藤村・秋聲追悼となる同号に講演「郷里金沢」を掲載したのであろう。同号には宇野浩二「島崎藤村」、島崎藤村「栗本鋤雲の遺稿 鋤雲翁四十六回忌に」などの他に、よく知られた広津和郎「徳田秋聲論」が掲載されている。

小山書店は当時シリーズ物の「新風土記叢書」を刊行しており、宇野浩二『大阪』（第一巻、昭和十一年）、佐藤春夫『熊野路』（第二巻、昭和十一年）、太宰治『津軽』（第七巻、昭和十九年）などが知られている。その第四巻、田畑修一郎『出雲・石見』（昭和十八年八月）の巻末には、第八巻として徳田秋聲『金沢』の予告が掲載されている。「古里の雪」という題名と、同じ版元であることから、同作はこの叢書のために執筆された可能性もあるが、川端の葉書があるので直接は「八雲」のためと考える方が妥当であろう。「古里の雪」の執筆時期は推測ではないが、まだ病気で衰える前の昭和十七年中であらう。

以上のように、秋聲が亡くなった昭和十八（一九四三）年の年頭に発表された「熊本日日新聞」の記事は、最晩年の体調不良の中で執筆された、執筆時期も明らかな最後の時事的評論という意味でまず貴重なものである。なお『三代名作全集 徳田秋聲集』の「あとがき」や「古里の雪」と同様、その文章が極めて晦渋な表現であることから、口述筆記ではないと判断する。前述した

『寒の薔薇』収録の「病床にて」は、内容が身辺雑記であることもあるが、文章としてはるかにわかりやすいからである。最後の長篇『縮図』（昭和十六年六月～九月『都新聞』）に象徴されるように、秋聲の文章は晩年になるほど一文が長くなり回りくどくなるが、昭和十七年以降のいくつかの文章はもはや難解と言うべきレベルに達する。そして、これは単に秋聲の高齢のためだけではなく、次節で述べるような時局への対応という側面が強いのではないだろうか。

五 「国策」と「抵抗」と——記事から見えるもの

この署名記事「武力戦のみならず文化の全面に賢くなること」がさらに重要であるのは、本稿の最初にも述べたように、それが日本文学報国会の小説部会長の立場で書かれたものであるからだ。以下でその内容を吟味してみたい。

冒頭から「大東亜戦争第二回目の新春を迎へ、緒戦の餘りにもすばらしい戦果に対する感激を新たに喚び起し」という文章から始まり、「過去百年にわたつて、亜細亜の諸民族を蚕食しつゝ、あつた彼等の毒牙に、徹底的な大手術を行ひ、亜細亜諸民族を彼等の桎梏から解放したことは、何と言つても世界の驚異と言はなければならぬ」と、日本が欧米の帝国主義国家からアジア民族を解放したことを強調する秋聲の書きぶりは、明らかに当時の時局に最大限に配慮したものである。続けて「これを以て此の難事業が完成したとはいへない」としながら、膠着した中国戦線やヨーロッパにおける独ソ戦の状況に言及し、「新たに戦争に参加した

ばかりの米国の戦時体制も亦悔るべからざる緊張度を示し豊富な物資の力を頼んで、飛行機と船舶の建造に全力を傾注しつゝ、あり、戦は正に是からだと見るのが至当であらう」と注意を促す。

そして「感激し易い代りに、また冷め易いとせられた国民の性格を矯め、天馬空を斬る底の情熱を共に、不幸にして今より遙かに不利な立場に置かれた場合に処することがあるとしても周章でず惑はず、沈着冷静事に当り、国家の前途を過らせないやうに、肝をすてからでなければならぬ」と国民を戒める。さらに、欧米列強によるアジア進出の歴史を振り返り「今次の戦争の淵源は古く、動機は新しい。この淵源と動機は永久に続くものと見なければならず、一勝一敗を以て猥りに事が決したと思ふ事は出来ない」とし「維新後に産れた我々は、動もすると米英の世界制覇が歴史的な運命のやうに考へられた事もあるが、之は言ふまでもなく錯覚である」と近代以後の世界のヘゲモニーを握る米英との対決の不可避を論ずるのである。このあたりも留保的、抑制的ではあるが基本的には国策に沿った物言いであり、どこまで本気で書いているかはともかくとして、文学報国会の小説部会長の言葉に相応しいであろう。

ただし、最終部に至つて次のような表現があることにはやはり留意すべきであろう。「欧米には科学に基礎をおいた各般の學術があり」、「道徳一本立の東洋の學問とは、自ら異なるものがある」ので「我々はそれをも克服し、武力戦のみならず、文化の全面にわたつて、賢くなる事が日本を偉大ならしむるために、亜細亜を興起するためにも必要である」というのである。記事のタイ

トルはここに由来しているが、武力面だけでなく文化面をも克服することで「亜細亜を興起」する必要で締めくくるこの文章は、やはり一見当時の国策に忠実であるように見える。しかしこの部分は「道徳一本立の東洋の學問」に対して「科学に基礎をおいた各般の學術」を持つ欧米の文化を称揚しているとも読める。これはリアリズムという科学主義を背景にした文学運動であつた、自然主義文学の作家らしい物言いであろう。さらに言えば、ここから「日本を偉大ならしむる」はずの「文化」を抑圧する当時の国家に対する異議を読み取ることも可能なのではなからうか。

ところで、大杉重男「帝国の縮図―徳田秋聲の戦争」(『小説家の起源』二〇〇〇年、講談社)は真珠湾攻撃から始まる昭和十六年末の海軍の行爲を「本年最後の掉尾の仕事として絶賛」する秋聲「掉尾の偉観」(昭和十六年十二月二十八日―三十一日「都新聞」)を「彼が書いたほとんど唯一の国策的文章」とするが、この新発見の「武力戦のみならず文化の全面に賢くなること」も明確にそのような「国策的文章」に分類されるであろう。しかしさらに言えば、「陸海軍の功績」に言及し「宣戦の大詔渙発以来、遂に來るべき処へ突きぬけて來たといふ氣持で、上下共に夜が明けたやうな爽々^{すがすが}しさを感じた」ことを吐露する『三代名作全集』の「あとがき」も、生前発表こそされなかったが「真珠湾や馬來沖における驚嘆すべき戦果の感激」を寝台車の同行者たちと語り合う場面から始まる小説「古里の雪」も充分に「国策的」である。

実際のところ、日米開戦を挟んで以降の秋聲の文章は、ある観点から見ればほとんどが国策的と言えるし、別の観点からは同時

にそれに抗うようにも見える。それは大杉も上司小剣の文章や秋聲の『三代名作全集』『あとがき』を題材に論ずるように、当時の文章が「検閲の眼を逃れるために意図して多義的な意味を持たすように書かれて」いるからである。よってこの文章についても、文学報国会の小説部会長という公的立場で書いた文章でありながら、やはり多義的に読めるように巧妙に構成されているのだ。

これより四ヶ月前に執筆された『三代名作全集』『あとがき』では、西洋文化に對置して我が国の文化が論じられている。

「我々が英米の文化を一応払拭して、新たに陸海軍の功績にふさわしい日本の文化を樹立するには、今少し時日が仮かされなければ」という秋聲は、「今のまゝの文化では」「やや低調で安易」であるとし、文化的な方面で「単純で若々しい日本本来の文化が台頭して来たせるか、或はまた戦争目的遂行に直接的なもののみが、人心を支配し、永遠性のあるものが、総て下積しうきみにされたためか（中略）国民の精神的糧になるべきものの少ない」のが「聊か遺憾ではある」と述べている。これと読み併せると「熊本日新聞」の記事も、欧米の「科学に基礎をおいた」學術をないがしろにして「道德一本立」の単純で「直接的な」ものを重んじる現在の我が国の文化状況を批判し、「国民の精神的糧になるべき」「永遠性のある」本来の文化的営為を「総て下積に」している現状を嘆き、さらに古い「淵源」を持ち「一勝一敗を以て」決するはずのない対立に対して、「武力」よりも「文化」によって国家を発展させるべきことを主張していると解釈できるのである。

昭和十六（一九四一）年十二月二十四日に東京会館で開催され

た文学者愛国者大会での秋聲は「片手には剣を持っても、これからの世界では、片手にはペンを持たねばならない」と演説したという（徳田一穂「秋聲の家」一九五五年十二月「隨筆」、前掲『秋聲の家』収録）。まさにペンの力により「文化の全面にわたつて、賢くなる事」を主張しているのである。なお、同文献によれば前述の「八雲」の原稿依頼で川端康成が秋聲を訪問したのはこの文学者愛国者大会の翌日だったそうで、この依頼を念頭に置きながら秋聲が石川文化振興会の招きで帰郷し、「古里の雪」を執筆しようとした関係性がうかがえる。

ところで、これも先に引用した松本美樹「秋聲先生の温容」によれば、松本が昭和十七（一九四二）年の秋に秋聲・一穂父子と銀座に同行すると文学報国会の話になり、「おやちさんは小説の隊長ですよ」と言う一穂の「ひやかすような口調」に対し、秋聲は「しぜんいくらか顎が突き出しかげん」になる「れいの手つきで真をお咥わらいえに」なりながら「噎おひを押し堪えられてあるかに見える」という。いかにも秋聲らしい態度といえようが、ここでの秋聲の「噎」は、有名な中野重治「そのとき徳田秋聲と武者小路実篤とが顔を見合わせた」（『わが国わが国びと』、一九七五年、新潮社）に描かれる、昭和十七年六月十八日に日比谷公会堂で開かれた文学報国会の発足式の壇上で、東条英機が「由来文芸の仕事は天才者の仕事で」と祝辞を述べた際に、小説部会長の徳田秋聲と劇部会長の武者小路実篤が顔を見合わせて「同じ微笑を苦笑した」という逸話を思わせるものがある。中野は「あれほどちがつた二人から、東条の『天才』が同じもの、共通の、共同のもの

のを触発した」ことを興味深いと記している。大杉重男（前掲）もこの文献を引きつつ、東条の文学者たちへの秋波とそれに対する秋聲の拒絶を、中野の小説『むらぎも』（一九五四年、講談社）で片口安吉（中野）が拒絶した流行作家葛飾（芥川龍之介）の「誘惑するようなきれないな目」になぞらえているが、この「微苦笑」という表現は、むしろ芥川の友人であり、また昭和十七年十一月三日に第一回が開催された大東亜文学者大会の発案者とされ、文学報国会の初代事務局局長も務めた（ただし後に軍部ににらまれて退陣した）久米正雄の「微苦笑」を直接的に想像させる。実際この言葉は文壇の流行語だったので中野の念頭にあったのではなからうか。その久米自身が文芸統制下で忘れてしまった「微苦笑」を、秋聲は文学報国会の発足式というその極点において公衆の前でたたえてみせたのである。

徳田一穂の短篇「一つの峠」（昭和十七年三月「新潮」、前掲『秋聲の家』収録）には、秋聲が日米開戦を報じるラジオの前で「物事に余り感激しない父親も感動を包み切れない容子」であったことが記されており、同時に資源と軍備に勝る大国アメリカ相手の勝利は難しいことも認識していた。真珠湾攻撃より半月ほど前の昭和十六（一九四一）年十一月二十七日付の秋聲の日記には「つまり計算では勝目のないことは専門家にはわかつてあるものらしい」と記されている（『続日記抄』昭和二十年十月「文芸」）。これは改造社の編集者から聞いた「海軍将校の或る人」が「目をつぶつて遣る」と言っていたという話への感想であり、その諦観は「熊本日」の記事にも表れているが同時に科学的検証を軽視

する開戦論への違和感も看取される。またアンケート「世界からなくしたいもの」（昭和八年一月「婦人之友」）に「軍備」と書いたように残酷な戦争と世界で台頭するファシズムを強く嫌っていたと同時に、始まってしまった戦争については国家の勝利を秋聲は切実に祈つてもいた。これらは矛盾ではなく、文学者を含む多くの国民にも共有される感情であつたらう。

もちろん、「微苦笑」とは基本的にシニカルな行為である以上、それをするこゝと自体が本質的な抵抗になるわけではない。ここまですで本稿が紹介してきた記事「武力戦のみならず文化の全面に賢くなること」の性格もこれと同様であり、国家の方針に対する真正面からの反対ではあり得なかつた。掲載紙「熊本日新聞」の社史から紹介したように、強力な検閲下でそのような言論での抵抗は全く不可能になつていたのであり、しかも文学報国会の小説部会長として国策的な発言を求められ、また実際にそのように振る舞いながら、秋聲は辛うじて言うべきことを言おうとしたのである。つまりこの記事は第一に、秋聲のような反国家的ではない自由主義の作家でさえ、ここまで妥協しないと書けない当時の過酷な言論状況の証拠となるものである。しかし第二に、そのような厳しい文化統制下における死を予感した老作家による必死の抵抗の証左でもあったのだ。それを当時の心ある人々はきつと読み取ったことであらうし、また現代に生きるわれわれも、そのようなぎりぎりの倫理をこそ、ここでの苦法に満ちた秋聲の文面から救い出すべきであるのだ。

註

(1) 実際のところ、多作を極めた秋聲の未発見の文献は他にもまだあるはずである。

(2) 明治二十八年に退学して陸軍士官学校へと移った。

(3) 秋聲と俳句の関係については二〇二一年八月「坂の上の雲ミュージアム通信 小日本」に「秋聲から見た子規」という短い文章を書いた。

(4) 以上の記述は全て西田閑夫『創刊のころ——金沢の戦後雑誌から』（一九七三年、私家版）を参照した。この北川重吉は戦後いちはやく石川県文化聯盟の創設や文芸誌「北窓」の創刊にも関わっている。また戦後に北陸新聞社社長も務めた赤井米吉が戦後に郷里で創設したのが金沢女子専門学校（現金沢学院大学）である。

(5) 秋山稔（前掲）によれば当時の新聞には「座談会」とあることから、その座談から抜き出してまとめ直した可能性もあると。

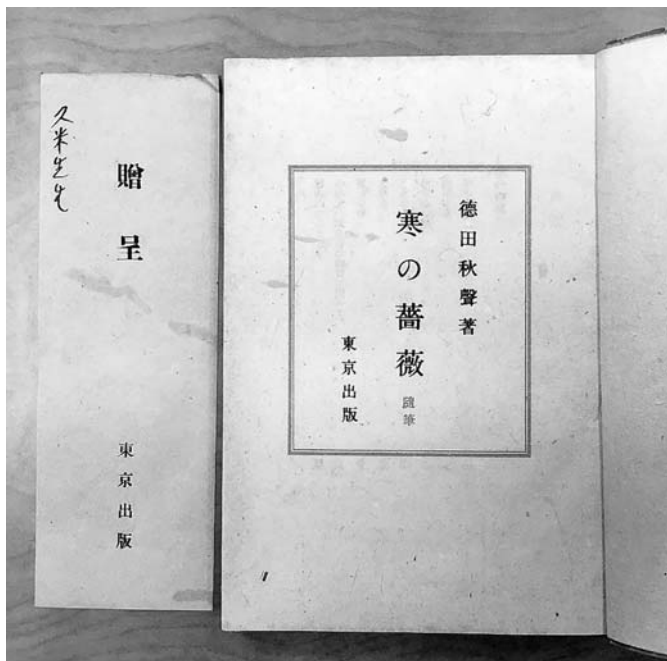
(6) 徳田一穂『秋聲と東京回顧 森川町界限』（二〇〇八年、日本古書通信社）では川端の来訪は会の二、三日後となっている。

(7) その一穂自身も秋聲の没後、文学報国会の事務局で働いた時期があったことがわかっている。野口富士男『海軍日記 最下級兵の記録』（二〇二一年、中公文庫）にその事実が記されており、またそのときの体験が元になったと思われる一穂の戦後の小説「風塵 K君への手紙」（一九四六年二月「新

(8)

人）には「××報国会」で働いている主人公が登場し、作家達の執筆可否のリスト化などの検閲関連業務をやらされたことが書かれている。このことは編者「秋聲の家 徳田一穂作品集」（二〇二〇年、徳田秋聲記念館文庫）、『街の子の風貌 徳田一穂 小説と随想』（二〇二一年、亀鳴屋）の解説その他で言及できなかったため、ここで補っておく。なお、これに関連し、秋聲研究者の亀井麻美氏のTwitter (<https://twitter.com/kameiasami>) 二〇二二年一月十九日、二十日、二十三日付）により巖谷大四『私版昭和文壇史』（一九六八年、虎見書房）に久米正雄の後に事務局長になった中村武羅夫のもと、岡田三郎が機関誌「文学報国」（『学芸新聞』の後進誌）の編集長を務め、一穂はその下の編集員だったとの記述があること、野田宇太郎『灰の季節』（修道社、一九五八年）にも報国会の事務所に一穂、芳賀檀、伊藤整、岡田三郎がいたこと、高見順『敗戦日記』（二〇〇五年、中公文庫）の昭和二十年一月十日の記述にも一穂が同所にいたことが述べられており、さらに一穂自身に「文学報国団の生誕に寄す」（昭和十七年六月一日「帝国大学新聞」という文章があることを教えられた。いつものことながら、亀井氏には深く感謝申し上げたい。

昭和十七（一九四二）年六月十五日付「日本学芸新聞」によれば「由来文学は天才によつて振興される」とある。



附記：本稿中の徳田秋聲の引用は「熊本日日新聞」の記事を除き

『徳田秋聲全集』（八木書店）より行い、その他の引用は記載の文献より行った。同時代文献については刊記を元号（西暦併記）で、戦後の研究文献については西暦で示した。

なお本稿で取り上げた秋聲の新聞切り抜きは徳田秋聲記念館名誉館長の徳田章子氏より、また石田波郷主宰の俳句誌「鶴」は日本古書通信社の樽見博氏より、さらに西田罔夫『創刊のころ——金沢の戦後雑誌から』は金沢のモンスーン企画の安藤紫氏よりそれぞれご提供を受けたものである。各位に深く感謝申し上げたい。

また、同時期に本稿の内容と関連する資料として、明治大学文学部の能地克宜氏より久米正雄旧蔵と思われる秋聲『寒の薔薇』の初版本の提供を受けた。氏にも感謝申し上げますとともに、上にその画像を掲げる。

（おおき・しもん 本学特任教授）